

相互行為中の身体動作を対象としたマルチモーダル連鎖分析から身体記号学へ

企画責任者：高梨 克也 (滋賀県立大学)
話題提供者：坂井田 瑠衣 (公立はこだて未来大学)
安井 永子 (名古屋大学)
山本 敦 (早稲田大学)
榎本 剛士 (大阪大学)
指定討論者：片岡 邦好 (愛知大学)
古山 宣洋 (早稲田大学)

1. 企画概要 (高梨克也)

本ワークショップ (以下 WS) では、人々の自然で自発的なコミュニケーションの中で生じる身体動作 (身振り) の記号としての役割を解明する「身体記号学」という新しい領域の確立を目指した議論を行う。

1.1 背景

C. S. パースによる記号の三分類に倣えば、言語のような象徴記号 symbol とは異なり、身振りでは指標 index や類像 icon として意味が重要になるが、近接性に基づく指標記号や類似性に基づく類像記号の「意味」は相互行為の文脈やその場の物理的環境に深く依存しているため、その客観的な認定が難しい。例えば、ある指さし動作が指示 reference という目的を達成できているかは言語的な発話との時間的共起や、指示対象物や受け手との間の空間的配置、受け手の視覚的注意といった、その瞬間のさまざまな文脈要素を参照せずには判断できない。逆に、参加者の姿勢や身体方向の変化などは、従来のジェスチャー研究では扱われないが、こうした身体動作であっても、進行中のコミュニケーションの中の特定のタイミングで生じることによって受け手からの有意味 relevant な反応を引き出している限り、意味のある「記号になっている」といえる。従って、ここでいう身振りには、指さしやその他の手によるジェスチャーだけでなく、身体動作や視線などのさまざまな非言語行動も含まれることになるが、その一方で、対象となるのはコミュニケーションの中で参加者にとって意味を持つ身振りのみということになる。

周知のように、パースは単に記号を静的に三分類しただけではない。むしろより重要なのは、記号現象に含まれる記号—対象—解釈項の間の三項関係が形成されていく動的なプロセスを「記号過程」という推論として定式化しようとしたという点である。だとするならば、こうした記号過程の考え方は従来のマルチモーダル連鎖分析における「記号として解釈されることになる、ある主体の身振り」と「その意味を解釈してそれに反応する受け手の次の行為」との間の連鎖関係をより詳細に解明し、モデル化していく際の強力な導きの糸になるのではないか。こうした発想に基づき、本 WS では、マルチモーダル連鎖分析とパース流の記号学との間の相互関係を積極的に探ることにも挑戦したいと考えている。

1.2 WS の狙い

- A. コミュニケーション場面での行為者の身振りが他の参加者によって「意味のあるもの」と認識されることによって「身体記号」となるのはどのような相互行為・認知プロセスによるか？
- B. そのプロセスを事例に基づいて体系的に記述していくにあたって、会話分析に端を発するマルチモーダル連鎖分析の手法と C. Goodwin やパースの記号学的なアイデアとは、それぞれどのような強みを持っており、またどのようにして互いに整合的に接続可能であり、逆に何が課題となるか？

1.3 話題提供と指定討論

本 WS では、以上のような基本的な身振り観・コミュニケーション観を共有しつつも、少しずつ立場の異なる 4 人の話題提供者から、それぞれの理論的立場・背景について、事例分析も交えながら紹介していただく。

まず、坂井田による話題提供では、シンボル中心の言語学的な手法では難しかった、コミュニケーションの中で個々の

身振りの「意味」の認定がより確かな証拠に基づいて可能になることを詳細な事例分析を通じて例証する。日本科学未来館で収録された科学コミュニケーターと来館者による展示物解説場面のビデオデータを用いて、科学コミュニケーターが視線の向け先や立ち位置を変えるとといった身体動作が、来館者による「歩き出す」という反応を引き出す「記号」として立ち現れることを示す。また、そういった「記号」は、実際にはさまざまな言語的・身体的資源が連鎖的・統合的に配置されることによって理解可能にされることを確認する。

このように、相互行為では、意味と行為は複数の言語・非言語（身体）的資源の統合によって、つまりマルチモーダルに成り立っている。そのため、分析者が当該の身振りの意味を特定していく際は、その身振りを単体で捉えるのではなく、それが発話や他の身体動作とどのような配置関係にあるかを具に観察する必要がある。それに加え、その身振りの直後の受け手の「反応」を体系的に参照することにより、それが受け手に実際にどのような意味や行為を持つものとして理解された可能性があるかについても確認する。これは、Sacksらの会話分析における「次のターンによる証明手続き next turn proof procedure」を身体動作も含めたマルチモーダル分析に拡張したマルチモーダル連鎖分析と呼ばれる分析手法である。安井による話題提供では、相互行為の中で見られる指さしのような典型的な指標記号の使用の事例を対象とした分析を通じて、マルチモーダル連鎖分析についてさらに詳細に論じる。

会話分析の基本的な考え方にに基づき、多様な社会文化的かつ物理的な環境での相互行為のマルチモーダルな分析の方向性を長年切り開いてきた研究者の一人にC. Goodwin氏がいる。山本による話題提供では、氏の晩年の著作であるCo-Operative Actionを中心として、氏の分析手法の背後にある理論的体系とその射程について考察する。特に注目するのは、氏が提案した諸概念にみられる“記号論的 semiotic”という語である（例えばマルチモーダル分析で広く用いられる“相互行為的資源 interactional resources”等に代わって用いられる“記号論的資源 semiotic resources”）。氏の理論的体系はいくつかの重要な点で会話分析と異なるが、その中でこの“記号論”がいかなる目的で用いられているのか、どのような基盤をもち、いかに分析の射程を広げるものなのかを考察する。

従来の連鎖分析では「観察可能な事実」を重視することから、＜行為者の身振り＞とこれに対する＜受け手の反応＞の二項間関係の分析が行われていた。しかし、これらの二項は解釈者による「推論」によって媒介されているはずである。そこで、榎本による話題提供では、M. Silverstein氏を中心にPeirce記号論を取り入れながら発展してきた言語人類学のコミュニケーション理論も参照しつつ、Peirce記号論における記号—対象—解釈項の三項関係により明示的・意識的に依拠しながら、コミュニケーションで生じる「身振り」に迫る。人々のコミュニケーションが社会・文化的にコンテキスト化されたプロセスであることと、言語使用だけでなく身体動作や指示対象物の配置といった要素もまたコミュニケーションを構成する重要な一部であることの両点を認めた上で、マルチモーダルな連鎖をマルチモーダルな記号過程として捉えるための一つの方途を提示する。

以上の一連の話題提供を受けて、片岡邦好氏と古山宣洋氏による指定討論では、記号論や言語人類学、マルチモーダリティ、ジェスチャー分析などの観点からの講評と問題提起を行っていただき、最後にフロアも交えての総合討論を行う。

1.4 付記

本WSは、科学研究費助成事業学術変革領域研究(B)計画研究「言語相互行為における身振りと手話を対象とした身体記号学」(22H05013, 2022-2024FY, 研究代表者:高梨克也)の支援により行われるものである。このプロジェクトは、研究領域「言語相互行為における身振りと手話を対象とした身体記号学」の一環をなすものであり(A01身体班)、身体班の研究課題の中には、今回のWSでの中心的な議題以外にも、今回のような理論的アイディアに基づく身体記号アノテーションを付与したマルチモーダル相互行為コーパスを情報理工学分野での動作認識や言語理解などの精度向上に活用する可能性を模索することや、身振りと言語のコミュニケーションにおける記号過程の比較を通じて、言語と非言語の統合体であるマルチモーダルコミュニケーションの分析が従来のシンボル中心の言語観を超えるどのような新たな記号学的展望をもたらすことができるかを展望することなども含まれている。詳細は次のHPを参照されたい。

<https://research.nii.ac.jp/EmSemi/index.html>



2. 身体動作の「意味」を認定する：未来館 SC コーパスを例に（坂井田瑠衣）

2.1 はじめに

本節では、詳細な事例分析を通じて、シンボル中心の言語学的な手法では難しかった、コミュニケーションの中での個々の身体動作の「意味」の認定がより確かな証拠に基づいて可能になることを例証する。科学館における科学コミュニケーターと来館者による展示物解説場面のビデオデータを用いて、科学コミュニケーターが特定の方向に視線を向ける、立ち位置を変えるとといった身体動作が、来館者による反応を引き出す「記号」として立ち現れることを示す。また、そうした記号の「意味」は、様々な言語的・身体的資源が連鎖的・統合的に配置されることで理解されていることを確認していく。

2.2 データ：未来館 SC コーパス

未来館 SC コーパスとは、日本科学未来館（東京都江東区）において科学コミュニケーター（SC）と来館者の日本語会話を映像収録したマルチモーダルコーパスである（城・牧野・坊農・高梨・佐藤・宮尾，2014；Bono, Sakaida, Makino & Joh, 2018）。本コーパスは、2014年から国立情報学研究所坊農研究室を中心に収録・整備されてきた。

本コーパスの収録にあたっては、未来館の協力のもと、日々の SC と来館者の会話にできるだけ近い環境が準備された。収録協力者は、未来館のスタッフがエキスパートとして選んだ 15 名の SC と、収録当日に自発的に未来館を訪れていた 79 名の来館者である。SC には普段どおり来館者に展示物を解説してもらい、1 回の会話につき 1 名の SC が、1~5 名（平均 2.26 名）の来館者に展示物を解説する様子が収録された。計 35 会話、総時間 8 時間 17 分 22 秒、1 会話あたりの平均時間 14 分 30 秒のデータが収録された。

SC たちは、多くの場合、収録エリアの入口近くに配置されていた太陽系惑星の模型（以下、惑星模型とする）から説明を始め、続いて「すばる望遠鏡」の模型（以下、すばる望遠鏡模型とする）に移動して解説を続けていた（図 1）。ここでは、SC が来館者を惑星模型からすばる望遠鏡模型に誘導していた 11 会話のうち 1 つの会話を取り上げ、事例分析（坂井田・坊農・牧野，2020）を紹介する。

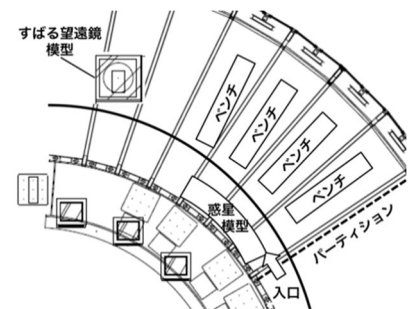


図1 展示物の位置関係

2.3 事例分析

事例（図 2）では、科学コミュニケーター（SC1）が 2 名の来館者（V1, V2）を相手に展示物の解説をしている。

事例の冒頭で、参加者たちは惑星模型を半円形に取り囲むようにして立っている（#1）。SC1 は「宇宙（を）調べる方法」が「大きく分けて 3 つ」ある（1 行目）という説明を始め、「理論」、「コンピューターシミュレーション」、「望遠鏡」を列挙する（1~5 行目）。1 つ目と 2 つ目の方法を説明している間、SC1 は身体を V1, V2 に向け、視線を正面の惑星模型に向け続けている。それに対して、V1, V2 も SC1 の顔に視線を向けて説明を聞いている。

しかし SC1 は、「シミュレーションをするのと」（4 行目）の末尾で間を空け、右を向いて後ろに下がり、そのまま間を空け続けながら、SC1 の右側に位置しているすばる望遠鏡模型に視線を向ける（#2）。これらの一連の発話と身体動作により、SC1 が、これから 3 つ目の「宇宙（を）調べる方法」について、右側にある対象物に何らかの点で関連づけながら説明しようとしていることが予示される。

これらの一連の SC1 の発話と身体動作に対して、V1 と V2 は身体動作で反応する。SC1 が「も 1 個」（5 行目）と発話を再開するのとほぼ同時に、V1 と V2 は、ともに右側に視線を向ける（#3）。さらに V1 は小さく後ろに一步下がることで、右側にある注視対象に対して身体全体を向け変えようとする。これらの身体動作により、V1 と V2 は、SC1 が始めようとしている説明を、右側の注視対象を見ながら聞く用意があることを示している。つまり V1 と V2 も、一連の SC1 の発話と身体動作



図2 分析事例

を「SC1が右側にある注視対象と何らかの点で関連づけられた説明をしようとしている」と理解していることがわかる。

SC1は「も1個」と発話した直後、再び間を空けると同時に、右側のすばる望遠鏡模型を指さす(#4)。これによりSC1は、V1とV2に対してすばる望遠鏡模型を注視することを明確に促す。これ以前からV1とV2は右側を注視していたが、ここで確かに「注視すべき対象はすばる望遠鏡模型である」ことが理解可能になる。

続いてSC1は、すばる望遠鏡を指さしつつ約0.15秒の間を空けた後、「使ってるのが: ああいう::」(5行目)と発話するとともに、その末尾で後ろに下がる動作を終え、両足を揃える(#5)。SC1が後ろに下がる動作を終える直前、V1とV2はさらに身体動作で反応する。V1は、SC1が後ろに下がって立ち位置を変えたことに反応し、少し前に出ることで自らも立ち位置を調整する一方で、V2は、左足を前方に大きく踏み出し、そのまま淀みなく歩き出す(#5, #6)。

ここでは、SC1が後ろに下がりながらすばる望遠鏡模型を指し示したことに対して、V1とV2が異なる理解をしていることがわかる。V1は「SC1は(ひとまずは)そのままの場所で解説を続けようとしている」と理解し、立ち位置を調整している。それに対してV2は、「SC1はすばる望遠鏡模型まで移動するように促している」と理解し、歩き始める。この時点では、SC1が注視を促す発話は完了可能な点に達しておらず(5行目、「ああいう::」)、その後に注視対象を指示する発話が続くことが予示されている。V2は、SC1によってマルチモーダルに組織されつつある、すばる望遠鏡模型への注視の促しを、それが完了する前にいち早く移動の誘導であると理解し、歩き始めている。

SC1は5行目で「ああいう::」と発話した後、約0.5秒の間において指さしをやめ、V1とV2に視線を戻す。その後、SC1は「望遠鏡。」(5行目)と発話しながら、その末尾で歩き出す(#7)。ここでSC1は、V2が既に歩き始めていることに気づいた上で、自らも歩き始めているようである。すなわち、この時点でSC1は、自らの発話と身体動作がV2に「すばる望遠鏡模型まで移動するように促している」と理解されていることを確認し、自らも歩き出すことによって、そのまま全員での移動を開始しようとしている。V1は、約0.25秒の沈黙(6行目)の後、5行目のSC1の説明に対して「(う↑::↓ん。)」と反応しつつ(7行目)、V2とSC1が歩き出したことに追従するように歩き始める(#8)。

2.4 「意味」を決めるのは誰か

上記の事例において、SC1はV1とV2に次の展示物に移動することを明示的には伝えていない。このことはV1とV2の反応の違いにも表れている。V1とV2は、SC1の発話(「も1個使ってるのが:」)と身体動作(右側を見ながら後ろに下がり、すばる望遠鏡模型を指さす)によって立ち現れた「記号」に対して、それぞれ異なる「意味」(「SC1は(ひとまずは)そのままの場所で解説を続けようとしている」と「SC1はすばる望遠鏡模型まで移動するように促している」)を付与している。

こうした「意味」の多様さは、身体という相互行為媒体の特性によるものだろう。Goffman(1963)は、「人間の身体には伝達媒体の働きが本来そなわっている」とし、「伝達媒体となる人間の身体に『関連』する」情報のことを「表出的メッセージ」と呼んだ(邦訳, p. 15)。これは、「社会的に確立した言語手段(すなわち話しことば)、あるいはその代用となる文字や図や身振りなどの手段」による「言語的メッセージ」とは異なり、「情報は偶発的に、あるいは何気なく、または意味あり気に伝達され、受け手はそれをひろう」こととなるようなものである(邦訳, p. 15)。つまり、SC1の一連の行為のように「意味あり気に」産出された身体動作の意味を決めるのは、それを理解する受け手(V1やV2)であり、その理解がいかなるものであったのかは、受け手自身による次の反応によって、他の参加者に(さらには分析者にも)公然化されていく。

このように、連鎖的・統合的に産出されていく発話や身体動作に対し、「今ここ」の相互行為においてどのような「意味」が付与されているかを、受け手による次の反応を手がかりとして確かめていく手法を「マルチモーダル連鎖分析」と呼ぶ。

参考文献

- Bono, M., Sakaida, R., Makino, R. & Joh, A. (2018). Miraikan SC Corpus: A trial for data collection in a semi-open and semi-controlled environment. *Proceedings of LREC 2018 special speech sessions: Speech resources collection in real-world situations*, 30-34.
- Goffman, E. (1963) *Behavior in public places: Notes on the social organization of gatherings*. New York: Free Press. (丸木恵祐・本名信行訳(1980). 集まりの構造—新しい日常行動論をもとめて— 誠信書房)
- 城綾実・牧野遼作・坊農真弓・高梨克也・佐藤真一・宮尾祐介(2014). 異分野融合によるマルチモーダルコーパス作成—展示フロアにおける科学コミュニケーションに着目して— 人工知能学会研究会資料, SIG-SLUD-B401, 7-12.
- 坂井田瑠衣・坊農真弓・牧野遼作(2020). 「次の場所まで歩く」ことの相互行為的組織化—科学コミュニケーターによる来館者誘導の身体的プラクティス— 質的心理学研究, 19, 7-25.

3. マルチモーダル連鎖分析 (安井永子)

3.1 はじめに

本節では、なんらかの身体動作が相互行為において有意な「記号」となっていることを示すために、「マルチモーダル連鎖分析」が有用であることを示す。坂井田原稿で見た通り、マルチモーダル連鎖分析は、相互行為における言語的・身体的資源の連鎖関係と統合性との両方に注目した分析手法である。これは、自然に生じた相互行為場面を分析対象とし、相互行為の参与者自身の視点から、行為の産出過程を詳細に観察する会話分析の手法を基本としている。会話分析によると、人々が発話と身体動作によって生み出す行為や意味は、相互行為において連鎖的に紡がれている (Schegloff & Sacks, 1973)。そのため、ある発話や身体動作を分析する際、会話分析では「次のターンによる証明手続き(next-turn proof procedure)」(Sacks et al., 1974)を用いて、その発話や身体動作の直後に、受け手がどのような反応をしているかを体系的に参照することにより、その発話や身体動作がどのような行為や意味を持つものとして受け手に理解された可能性があるかを確かめることが重要となる。また、相互行為では、発話の言語構造、発話の音調、ジェスチャー、視線、姿勢、顔の表情、その他の身体動作、身体の配置関係、周囲の物理的環境などの複数の相互行為資源の統合によって、行為や意味が包括的に形成される (山本原稿)。つまり、ある身体動作がどのような意味を持つかを分析者が特定するためには、その身体動作を単体で捉えるのではなく、それにとまらう他の相互行為資源、周囲の環境の性質などによって与えられる文脈の参照も必要となる。

3.2 指さしのマルチモーダル連鎖分析

ここで、我々が頻繁に用いるジェスチャーの一つ、指さしを例に挙げてみよう。指さしは、主に特定の方向や場所や対象に受け手の注意を向けさせる「指示 (reference)」において用いられる指標記号 (index) である (Kendon, 2004; Kita, 2003)。一つの指さしによって何が指示されているか (指標性) は、伸ばした指とそれが向けられた対象との空間的近接性のみならず、指さしと時間的に共起する発話やその他の身体動作を通して理解可能となる。例えば、「このペン」と言いながら手元のペンを指さす場合と、「この色」と言いながら同じペンを指さす場合では、同じものに指が向けられてはいても、指示対象が異なることは明確だろう。マルチモーダル連鎖分析では、指さしと、それに結び付く文脈要素、および、指さしを含む行為に対する受け手からの反応を特定することで、その指標性を明らかにしていく。

会話の中で用いられる指さしには、周囲にある物を現場指示するものだけでなく、会話の中で言及された内容を指し示す (文脈指示) ものものもある (安井, 2019; Yasui, 2023)。そのような指さしの指標性に着目してみよう。会話における E, F, G, H の4人の女子大学生による以下の会話断片は、G が、理想とする男性の条件として、「虫退治してくれればいい」(1行目)と述べた場面である。注目したい指さしは、20行目で、G から F に向けて産出されている。

[Sakura 08: kumo]

1 G: 虫退治してくれればいい
2 (0.4)
3 H: .hh
4 F: あ(.)それ大事:
5 E: ufufu
6 G: だよ
7 (0.2)
8 E: 一緒[になつてキャーとか[(h)い(h)つて (h)
9 F: [それ大事
10 G: [fufufufufu
11 E: hahaha hahahaha
12 H: [いやだ:
13 G: [hahahaha .hhh
14 H: hahahaha .hh
15 G: hh hh
16 F: あと [別に大丈夫とかいって寝てる人もやだ ((Gを見ながら))
17 H: [ほっとか来たなら (やだ) ((Eを見ながら))
18 (.)
19 F: ah [hh hh
20 G: [*ah .hh だけ d-*#あたしそれだよ hh hh ((E と H が G に視線を向ける))
G身 *..... *Fに指さし-->

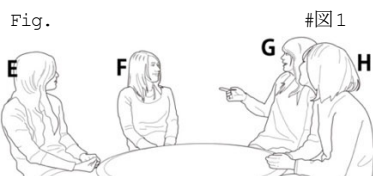


図1 GからFに向けられた指さし

- 21 (0.2) ((FはGから視線を逸らす))
 22 E: ん?
 23 (0.3)
 24 F: 気に*しない人? ((Gに視線を向ける))
 G身 --> *,,,,-->
 25 G: わた*しく蜘蛛が>上にいて:, (.)>でもそのまま寝てた<
 G身 --> *
 26 (1.7) ((Fは視線を上))
 27 H: °どんくらの蜘蛛°
 28 (0.4)
 29 G: こんなでかい
 30 H: ええ:::
 31 G: hahahaha ((GはFに視線を向ける. FはGを見たまま無表情.))

Gが指さしを産出するのは、16行目でFが「あと別に大丈夫とかいって寝てる人もやだ」と意見を述べた後である。Gは笑いながら右手を胸の高さまで上げ、「あたしそれだよ」と言いながら右手の指さしを右隣のFに向ける(20行目、図1)。この指さしがFに向けられていること(空間的近接性)、Fの発話と直後に産出されていること(時間的近接性)、および、「あたしそれだよ」という発話と笑いと共に起ることを踏まえると、この指さしはFへの共同注意を意図したものではなく、Fの直前の発話内容を指標するものであると考えることができる。では、受け手はこれにどう反応しているだろうか。Gの発話に対し、Eが「ん?」(22行目)と理解できないことを示す一方、Fは「気にしない人?」(24行目)と言い、Gの「あたしそれだよ」を、Gが蜘蛛の存在を「気にしない人」とあるという意味として理解したことを示している。これは、Fが、Gの指さしと指示詞「それ」を、Fの直前の発話内容を指示するものと捉えたことを意味している。実際、その後語られるGの体験談(「わたし蜘蛛が上にいて:(.)でもそのまま寝てた」(25行目))は、蜘蛛がいたのに気付いたがそのまま寝ていたというエピソードであり、Fが直前に述べた、「別に大丈夫とかいって寝てる人」に自分が当てはまることを示すものである。つまり、Gによる「あたしそれだよ」の指示詞「それ」と、共起する指さしとが、Fの直前の発話内容の一部、「別に大丈夫とかいって寝てる人」を指示するものであったことが遡及的に明らかになっている。

本節では、ある身体動作の意味や働きをマルチモーダル連鎖分析を用いて理解する例として、指さしの指標性の特定について考えた。上記の事例のように、周囲の環境にある具体的な事物ではなく、会話における言及内容が指示対象となる指さしに注目すると、その指標性が、指さしの指の向きによる空間的近接性のみに基づくものでないことは明らかである。マルチモーダル連鎖分析では、相互行為の展開と文脈において、指さしと時間的に近接する直前の発話や、指さしの産出者が指さしと共に、もしくはその前後で産出する発話や他の身体動作など様々な資源の関わりを具に記述していく。そして、受け手の反応を参照しながら、指さしが実際に受け手にとってどのように理解されたかを確認していくことにより、分析の確からしさを高めていくのである。

参考文献

- Kendon, A. (2004). *Gesture: Visible Action as Utterance*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Kita, S. (2003). Interplay of gaze, hand, torso orientation, and language in pointing. Kita, S. (ed.) *Pointing: Where language, culture, and cognition meet*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum pp. 307–328.
 Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4), 696–735.
 Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening Up Closings. *Semiotica*, 8, 289–327.
 安井永子 (2019). 笑いの対象に向けられる指さし—からかひにおける志向の分散と参加フレームの組織化— 安井永子・杉浦秀行・高梨克也 (編) 指さしと相互行為 ひつじ書房 pp. 123–157.
 Yasui, E. (2023). Sequence-initial pointing: Spotlighting what just happened as a cause of a new sequence. *Discourse Studies*, 25(3), 409–429.

4. C. Goodwinの「文脈的統合態」と「記号論」(山本敦)

会話分析の方法を用いた相互行為の身体的な側面の探求のうち、本WSの主旨において特に注目に値するのは、「記号論」を明示的に取り込んで分析手法を発展させたC. Goodwinの諸研究であろう。彼の分析手法は、会話分析の基本的な考え方を方法論的な基盤としつつも、社会文化的かつ物理的・身体的な世界における人々の間主観的な“生”の相互行為的な構成の過程の分析に向けて発展してきたため、上述の記号論を含めて会話分析との間に方法的、理論的なレベルで様々な違いを持っている(*cf.* 山本・牧野, 2023)。山本の話題提供では、Goodwinの理論体系において、どのような必要性のために、どのような形で「記号論」が導入されているのか、またそれによって拓ける分析の射程について考察する(以下の記述は断りのない限り Goodwin, 2019による。また、以下において示されるページ数は当該書のものである)。なお、本稿では紙幅の都合上彼の理論の骨格のみを抜き出して論じるが、Goodwin自身は丁寧な事例記述の中からこの理論体系を導き出していることを断っておく。

結論から述べると、Goodwinの理論体系において記号論は「なぜその振る舞いがその意味を担うものとして見えるのか?」というWhy?の問いに答えるために導入され、主要な分析概念である文脈的統合態を用いた記述の基本構造を提供しているといえるだろう¹。

先に述べた通り、Goodwinが主要な分析の視線を向けたのは真空中に孤立した言葉のやり取りとしての相互行為ではなく、我々が日常的に経験している社会文化的かつ物理的・身体的な生活世界の中でなされる相互行為である(p. 367)。相互行為の参与者たちが共有する環境は社会文化的に構造化されており、事物は生活を構成する諸活動と関連づいた道具としての性質を備え、また硬さや大きさ、色や味といった物理的・知覚的な性質を持ち(その性質も客観的実在のようなものではなく、諸活動と結びついた性質である)、動かし動かされ見て見られ、環境に関わりかけ改変する身体を含みこんでいる。生活世界の中でなされる相互行為内の振る舞いは、常に状況的であり、発話だけでなく物質や身体を動員して構成されている生の活動の一部分である。このため、Goodwinの分析においては、相互行為の構成に使われる媒体は発話に限らず、動作であれ、物体であれすべて相互行為の構成のための要素、すなわち「資源」として分析に登場する。

相互行為を構成する諸資源はそれぞれが生活世界における活動にかかわる意味連関の一部を担っているが、通常は同時に複数の意味連関の一部となっているために、当該の振る舞いにおいてどのような意味を担うものとして動員されているかはその資源単体では理解可能とならない。例えば指差しのようなジェスチャや物体の操作、姿勢の変化等の身体的な振る舞いは身体外の対象との関係を抜きに理解は困難である。つまり特定の資源は、他の諸資源からなる「文脈」の中に置かれることで初めて、特定の活動の意味連関の一部として用いられていることが明らかになり、理解可能性を得るのである(指差しジェスチャ単体と、それが「対象物(指の延長線上のこちらに向かってくるトラック) - 視線や姿勢(相互注視からトラックへ) - 共起する発話(危ない!) - 語調や表情(緊張, 大声, 恐怖)」という資源の組み合わせの中にある場合の差異を想像されたい)。この関係は“特定の資源”だけでなく“他の諸資源”にも妥当する(例:「危ない!」と「指差し - トラック - 相互注視からトラックへの視線 - 緊張, 大声, 恐怖の表情」)。すなわち、相互行為を構成する諸資源は理解可能性を相互に依存しあう相互文脈関係にあり、総体として見たときに個々の意味の総和以上の意味が創発するゲシュタルト的關係にあるといえる。

このように相互行為を見た場合、諸資源の全体的な構成の中の特定の資源・資源群に焦点化(テキスト化)したときに、その他の部分を文脈として理解可能性が立ち現れるという性質を持った、全体論的なシステムとして相互行為はとらえられることとなる²。参与者たちはこのシステムの中で新たな資源を追加したり、すでにある資源を変形させて再利用したりすることによって、新たな焦点化とその文脈を生じ、その都度の理解可能性を作り出し、行為連鎖を構成する個々の振る舞いを新たに産出する(「共 - 操作的行為」, p. 2)。

「記号論」は、この諸資源の相互文脈関係とその展開過程を記述するにあたって導入されている。「文脈的統合態」は相互行為における諸資源の全体的構成を指す概念であり(p. 123, 180)、上述の全体論的なシステムとその展開過程を記述するものである。文脈的統合態は、「記号論的領野」と「記号論的資源」からなる。記号論的資源は、内容としてはここまで資源と呼んできたものと同じだが、重要な特徴として、参与者たち自身が相互行為の構成要素として注意を向けている/向けるべきものとして志向しているものであること、かつそれが他の資源との間での記号論的關係(個々の資源の総和以上の意味を生じる時間・空間的並置関係)に持ち込まれており、それによってはじめて相互行

¹ 会話分析においてこの問いは、相互行為手続きが社会的・規範的に共有されていること(自然言語への習熟)を理論的前提として置くことによって、分析の直接の対象にはされない(*cf.* Garfinkel & Sacks, 1969)。

² 全体論的なシステムとしての文脈の概念はGoodwin & Duranti (1992) において Bateson のサイバネティクスの観点等を引用しながら展開されている。

為の資源として機能するという点が強調される(p. 238). 記号論的領野は、文脈的統合態内においていくつかの記号論的資源同士の関係から生じている局所的な記号現象である(p. 123, 173). 記号論的資源とは異なり、領野は単体でも活動におけるなにがしかの意味が理解可能となっているが、ジェスチャや発話、参加者の身体を示す志向の組み合わせ構造といった様々な領野同士が重ね合わせられて一つの全体性をもったゲシュタルト的な相互指標的關係にあることによって、活動を構成する振る舞い、行為、状態としての十全な理解可能が生じる。どのような領野の組み合わせが必要となるかは活動依存的であり、領野の組み合わせはその活動における共有環境への共同なかわり方の性質を反映する。記号論的領野および文脈的統合態の構成には単一の行為者だけでなく、活動に参加している複数の行為者が同時に関わっている。そのため文脈的統合態は、活動のあらゆる時点において、一方の統制に収まらない再構成が生じる可能性を常に持つ。そのような活動、行為、振る舞いの共同構成性・共同産出性を子細に分析できるのも文脈的統合態概念の特徴であり、参加者たちが相互に働きかけあいながら、共有環境内の資源を操作し、環境を改変し、相互行為上の意味を生み出しながら活動を展開していく過程としての、活動の相互行為的な構成システム(状況的活動システム, p.366)の記述を可能としている。

以上の Goodwin の理論体系において、記号論は資源間の関係とそれによって理解可能になる意味との関係についての理論的な基盤を与えていると考えられる。分析に用いられている記号構造はパースの記号論における三項関係「記号 - 対象 - 解釈項」であり、「指示する資源(群) A と指示される資源(群) B (+対象の一部としての社会文化的・生活的な意味連関)との並置関係(=記号 - 対象)」から「理解可能となっている意味(=解釈項)」が推論される、という形で資源間関係は分析される。パースの記号論は、特に意味理解の規範性が低く文脈依存性の高いアイコンおよびインデックス(資源同士の類似性(似ていること)と近接性(時間・空間的に近いこと)から成立する記号的関係)の分析において人間の理解・解釈の基本形式を提供しているだけでなく、それらによって構成される複数の記号論的領野の中に埋め込まれて相互文脈関係に入ることによって文脈依存的な理解可能性を得ている言語のようなシンボル(規則、規範によって資源同士が結びつく記号的関係)の分析についても、その理解可能性の基盤となるアイコン・インデックス構造の分析を可能にしている(p. 36)。加えて、この記号論という切り口は、生活世界を構成している言語、環境内の事物、意味解釈や状況的認知といった幅広い現象の分析上の区分を無効化し統一的に扱うことを可能とすることで、社会文化的かつ物理的・身体的な世界における人々の間主観的な“生”の状況的かつ共同な構成過程を、一つの相互行為システムとして記述することを可能にするものとなっている(p. 186)。

最後に、記号論的観点の導入によって拓ける射程について、Goodwin 自身の主張よりもさらに一步進めて論じたい。記号論によって相互行為の中から記号の媒体の操作と意味の構成の過程を区別しつつも一体の過程として分析できるということは、翻せば、相互行為の展開における物理的過程と意味的過程との間の関係を、同一過程としてだけでなく(時にはズレや食い違いをも含むこともある)二重の過程としても分析できる可能性がある。著者らの研究(山本・古山, 2020)では、熟練者のピアノレッスンにおいて、教示中および演奏中に用いられ演奏表現を指標するインデキシルな身振りが、指導の相互行為の意味的過程を構成する表現上の特徴の指標の機能にとどまらず、指導者と学習者の身体的な同期を介して学習者の演奏運動および表現の即時的調整の機能を同時に果たしている可能性が見出されている。こういった意味的過程の“外部”でありつつも記号の媒体としての身体を介して一体の過程となっている身体・物理的過程をとらえられる可能性は、言語的相互行為の一步手前の、共有環境への身体的構えの共有の水準で間主観的な生活世界に人々が棲みこんでいく過程を分析の射程に収める可能性を示唆するだろう。

参考文献

- Goodwin, C. (2019). *Co-operative action* (paperback edition). Cambridge University Press.
- Goodwin, C., & Duranti, A. (1992). Rethinking context: an introduction. In Duranti, A., & Goodwin, C. (Eds.), *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon*, pp. 1-42. Cambridge University Press.
- Garfinkel, H., & Sacks, H. (1969). On formal structures of practical actions. In McKinney, J. C., & Tiryakian, E. A. (Eds.), *Theoretical Sociology: Perspectives and Developments*, pp. 338-366. Appleton-Century-Crofts.
- 山本敦・古山宣洋 (2020). ピアノレッスンにおける演奏表現のマルチモーダルな協働的構築. *社会言語科学*, 23(1), 84-99.
- 山本敦・牧野遼作 (2023). C. Goodwin の方法: マルチモーダルな相互行為と資源の共-操作. *日本認知科学会第 40 回大会発表論文集*, 29-32.

5. 言語人類学を梃子に、パース記号論と身体記号学を接合する（榎本剛士）

5.1 基本的視座

本ワークショップのタイトルには「マルチモーダル連鎖分析から身体記号学へ」という言葉が含まれているが、これはどのような「移行」を意味するのだろうか。従来の連鎖分析では「観察可能な事実」が重視され、〈行為者の身振り〉とこれに対する〈受け手の反応〉の二項間関係が主要な分析・記述の対象となってきたことは否めない。しかし、これら二項の「間」には何があるのか。「身振りの意味は、それが生起する瞬間の様々なコンテクスト的要素を参照せずには判断できない」ということを受け入れるならば、両者の関係は決して直接的ではなく、様々なコンテクスト的要素が結びつく過程、および、そのような結びつきを受け取る（解釈する）ことを可能にするような「(メタ・コミュニケーション的) 推論」によって媒介されているはずである。そこで、榎本による話題提供では、シルヴァスティンを中心としてパース記号論を取り入れながら発展してきた言語人類学のコミュニケーション論も参照しつつ、パース記号論における「記号—対象—解釈項」の三項関係により明示的・意識的に依拠しながら、コミュニケーションで生じる身振りに迫るための萌芽的枠組みの構築を試みる。

5.2 パース記号論と言語人類学

1970年代中盤以降、ヤコブソンを經由してパース記号論を取り入れ、体系的な社会・文化コミュニケーション論を打ち立ててきた分野に言語人類学がある。その第一人者の一人であるシルヴァスティンは、言語人類学的な「見方」の勘所を“to look in terms of the socio-spacio-temporal dynamics of movement or flow of coming to coherence, such coming to coherence being a text, as it were, in its context of existence” (Silverstein, 2019) と言い当てている。この見方に即せば、コミュニケーションを分析することはすなわち、生起する諸々の出来事が「記号」として解釈され、それらが（共起する他の記号を含む）様々なコンテクストと結びつくことを通じて、社会・文化的に認識可能な結束性が創出されるに至る（物理的な次元には還元できない）動き・流れのダイナミズム・プロセスを捉えること、となる。

このように、言語人類学においては、生起した出来事とコンテクストとの結びつき、社会・文化的に認識可能な結束性の生成プロセスが理論化の重要な部分に位置しているが、この理論化のための言葉を提供しているのがパース記号論である。Silverstein (1976) は、パース記号論に依拠し、言語と社会・文化の実質的な接点が、従来の言語学が研究の対象としてきたような、言及と述定に特に貢献する言語の「象徴記号 (symbol)」としての次元にではなく、非言及指示的な状態で特定のコンテクスト的局面を指し示すような、あるいは、特定のコンテクスト的要素が定まらなければその言及指示対象を特定できないような（レジスター、転換子といった）「指標記号 (index)」としての次元にあることを見出した。

さらに、上記のような記号論的理解は、Silverstein (1993) において「語用」と「メタ語用」の相互（媒介・嵌入）作用プロセスを照射する一般コミュニケーション論としてより明示的に精緻化された。またその中で、生起する記号が（1）互いを「いたもの」として指標し合うことによって生じるもの、（2）言語使用を通じて、言語使用の出来事として指標されることによって生じるもの、（3）今・ここを超越した異界（神話の世界など）の出来事やタイプのダイアグラム（写し）として指標されることによって生じるもの、といった形（類像性、指標性、象徴性の三者が折り重なる形）で、社会・文化的に認識可能な結束性の生成に関する異なる記号論的あり様が示された。

5.3 コミュニケーション論としての身体記号学：記号過程モデル構築の試み

さて、（言語人類学に見られるような）パース記号論を取り入れたコミュニケーション論を、生起した出来事とコンテクストとの結びつき、および、社会・文化的に認識可能な結束性の生成プロセスに関する一般理論として捉えるならば、それは決して、言語に特化し身体を排除するような理論ではないことは明白である。むしろそれは、“coming to coherence” に貢献する様々な記号の謂わば「正当な取り分」を認め、身体動作や身振りの指示対象物の配置といった要素をコミュニケーション過程の重要な一部分として呼び込む（呼び込まざるを得ない）理論である。

ここで、パースによる「記号」の定義、および、パース記号論を特徴づける三項関係の重要な一部である「解釈項」の概念を確認しておこう。パースによれば、「記号とは一つの認識可能対象であり、一方においては、その対象と呼ばれる、〈それ以外の〉何ものかによって記号として規定（すなわち、特殊化）され、他方において、現実の、あるいは、潜在的な心をそのように規定するもの」である (EP 2: 492)。そして、その心の規定、つまり、「解釈する心が、対象によって [記号を通じて] 媒介的に規定されている状態」を、パースは記号によって生み出される「解釈項」と名づけた (ibid.)。しばしば参照される通り、記号は、対象との関係に応じて、類像記号 (icon)、指標記号 (index)、象徴記号 (symbol) の三つに分類される。また、上記のように特徴づけられる解釈項には、情感的解釈項（記号によって生み出された感覚）、活動的解釈項（注意力を行使して行われる、物理的・精神的なひとつの個別的行為）、論理的解釈項（思考、あるいは、他の一般的記号、

あるいは、形成または修正された習慣) などがある (ドヴァール, 2017)。

では、ここまで述べてきたことを基本的な枠組みとして、例えば、「科学コミュニケーター (SC) に誘導されながら展示を観覧する来館者が、次の展示物への移動を開始する」ことにまつわる記号過程をどのように考えることができるだろうか。このような探究を開始するにあたっては、何らかの参照点をまず定める必要があるが、その際、マルチモーダル連鎖分析が教える通り、観察可能な「受け手の反応」を体系的に参照することが有効である。なぜなら、この構えを通じて、「特定の『行為』を帰結として生み出すような推論 (記号) 過程に関する仮説を形成する」態度を確立できるからである。

提示するデータでは、SC による「宇宙を調べる方法」についての説明を受けている二人の来館者が、「理論 (計算)」「コンピューターシミュレーション」に次ぐ「もう一個」の方法である「望遠鏡」の模型に向かって歩き出している。この「歩き出す」という行為の基盤となる記号的推論は、以下のような形で措定できると考えられる。(なお、この事例は、坂井田による話題提供でも扱われている。同じ事例を扱うことで、様々な立場の間で基盤を共有できる/異にする部分を明確にでき、それが身体記号学をより立体的に (よって、堅固に) することにつながるだろう。)

【記号】 身体の向き (方向の類像的指標) ; 顔の向き (方向の類像的指標) ; 「もう一個」 (個物の指標) ; 二歩下がる (パスの指標) ; 「使ってるの」 (使用可能な何かの指標) ; 一歩踏み出す (方向の類像的指標) ; 手 (指さし) (方向と遠方の類像的指標) ; 「ああいう」 (遠称直示) — 【対象】 あ、向こうにある、あのもの — 【解釈項】 あ、向こうにある、あのものへの注意 ; (足が動くなどの) 反応

【記号】 「望遠鏡」 (社会・文化的知識の指標) — 【対象】 (すばる) 望遠鏡 (の模型) — 【解釈項】 宇宙を調べる三つ目の方法 (知識) ; 次の説明の対象物・次の説明が行われるところ・移動先 (観覧行為に関するモデル・知識) ; 移動・追従 (行為)

これら全てが統合的に経験されることで、社会・文化的に認識・解釈可能な (ジャンル化された) 「宇宙を調べるもう一個」の方法であり、次の説明の対象となる展示物であるところの望遠鏡 (の模型) に向かう移動」という結束性 (の一部) としての「歩き出し」が可能となると考えられる。もちろん、上記の記号過程に関する推論は萌芽的な段階にあり、視点の在りか、(間 [ま] を含む) 記号の生起タイミングと対象・解釈項の生成タイミングの同期・ズレなど、かなり大きな精緻化の余地を残しているが、少なくとも、<身振り>とこれに対する<受け手の反応>という連鎖現象が「記号の媒介」を基盤としていることを指し示しているのではないか。

5.4 展望

身体記号学を「言語学が切り捨ててきた部分を扱う分野」としてはじめてから矮小化することは、非建設的である。小山 (2008) の言葉を借りて言えば、「指標性と身体とを接合することに成功した時、テキストとコンテキスト、身体的 (現) 存在と社会的相互行為、構造と過程、言語人類学と認知科学、社会科学と心理学、これらを統合したような、一個の強力なコミュニケーション理論、包括性 (全体性) を持った語用論が、姿を現すのではないか」という射程の広い、還元主義に陥らない (「言語」「身体」のどちらも特権化しない) テーゼがきっと、コミュニケーション論としての身体記号学を永く支え、後押しするのではなかろうか。

参考文献

- ドヴァール, C. (2017). パースの哲学について本当のことを知りたい人のために 大沢秀介訳 勁草書房 [De Waal, C. (2013). *Peirce: A guide for the perplexed*. Bloomsbury.]
- 小山亘 (2008). 書評論文 Masako K. Hiraga, *Metaphor and iconicity: A cognitive approach to analyzing texts* MS
- Peirce, C. S. (1998). *The essential Peirce: Selected philosophical writings*, Volume 2 (1893-1913). Edited by the Peirce Edition Project. Indiana University Press [EP 2].
- Silverstein, M. (1976). Shifters, linguistic categories, and cultural description. In K. Basso & H. A. Selby (Eds.), *Meaning in anthropology* (pp. 11-55). University of New Mexico Press.
- Silverstein, M. (1993). Metapragmatic discourse and metapragmatic function. In J. A. Lucy (Ed.), *Reflexive language: Reported speech and metapragmatics* (pp. 33-58). Cambridge University Press.
- Silverstein, M. (2019). Getting - and getting across - the message. The 2019 Nora and Edward Ryerson Lecture, University of Chicago.